

パリ五輪

パリで行われていた、スポーツの世界的祭典オリンピックが閉会した。期間中選手たちはたくさんの感動を我々に与えてくれた。先日開会したパラリンピックもまた多くの感動を与えてくれることと思う。ところでそもそも我々は何に感動をしているのだろうか。観戦中必ず発する言葉は、「すごい！」ではないだろうか。そう選手たちのすごさに感動させられているのだけれど、何がすごいのだろうか。もちろん、選手との個人的な距離や競技への知識の違いによって、「すごさ」のポイントは少しずつずれるのだろうけど。

誹謗中傷があったり、感想の内容を吟味しないとそのことも避難されたり、スポーツはルールとそれを見守る審判がいることが前提だけど、その審判が避難されたり、放送の仕方が避難されたり、残念で悲しい状況もたくさん聞こえてくる。

「すごい」と思うことだけに目を向けるのではダメなのだろうか。

身体の使いの「すごい」に。

あの技術の域に自らの身体を鍛え上げられるのは、並大抵の努力では無理だと思う。もし、並大抵の努力を超えることが可能なら、あの場に立てるだろうか。それでも難しいかもしれない。そこには DNA だって、人との出会いだって、経済的状況だって、何より運だって必要で、他にも様々な要素が絡み合っているだろうから。

だからこそ、いろんな付随するもろもろのことに気を向けるのではなく、純粋に、身体の使いだけに目を向けるのが良いと思う。同じ人が、同じ条件でどれだけの可能性を表現できるか。人の可能性に我々は目を見張る。オリンピックやパラリンピックは、人の身体の使いの可能性に出会う場。ということは、選手を通じて、自分の身体の不思議に出会う場でもある。自分にもかかわるから、勇気になったり、意欲がわいたり、希望に満ちたりする。

個人の努力による変化は、周りの人を、世界を変化させる。つまり個人は世界とつながっている。

選手たちは必ず言う、応援してくれる人、自分を支えてきてくれた周りの人への感謝の気持ち。周りも、世界もまた、個人とつながっている。

個人は世界なのだというのを、まざまざと感ずることのできるスポーツの祭典は、だからこそ平和の祭典なのだと思う。

夏が終わり、日常が始まる。

日常の積み重ねは、まさに人の可能性の発見への歩み。

日々を大切に、2 学期を過ごして欲しい。